

「とりたて」のクライ文の意味分析

安部朋世

キーワード: とりたて、クライ、クライの位置、最低限、モダリティ

要 旨

本稿は、「最低限」を表す「とりたて」のクライ(グライ)について、「最低限」の意味をより分析的に捉え、記述し直すことを目的とする。

「最低限」を表すとされるクライを含む文は、

- 1) クライによって示される部分が表す事態について、「簡単/たいしたことではない」という意味に感じられる文だと言い換えられる
- 2) クライは命題をスコープにとりモダリティ部分をスコープにとらない
- 3) 「現象描写文」の場合は、他の種類の文では「最低限」の解釈が可能となる「名詞＋助詞＋クライ」の位置にクライを置いても、「現象描写文」に解釈できず、不自然な文に感じられる

という特徴が指摘できる。このことから、「最低限」を表すとされるクライを含む文は、

発話者が、クライによって示される当該事態を〈実現可能性が高い〉事態であると位置付け、そのように位置付けた事態について、「実現したい／実現できる／実現する／実現した／実現しろ…」等の発話者の主観的態度を表明する文だということができる。この記述によって、「最低限」を表すクライを含む文全体を統一的に説明することが可能となり、「とりたて」研究にとって重要なくとりたてられる要素と他の要素との関係〉についても、従来より明確に表すことができる。

1. はじめに

クライ(グライも含む)は、(1)から(5)のような「程度」を表す場合と、(6)から(9)のような「最低限」を表す場合があるとされる。

- (1) 希望者は1000名グライいたらしい。 (奥津 1986p. 66(2)3)
- (2) 粟粒グライの大きさの黒い点 (奥津 1986p. 66(2)4)
- (3) 梅蘭芳さんでとても60才を越した老人とは思えないクライきれいです。 (奥津 1986p. 66(3)4)

- (4) スポーツもいいが、病気になるまいグライに練習しなさい。(奥津 1986p. 67(4)2)
(5) その時の彼女の表情クライとらえがたいものではありません。(奥津 1986p. 67(5)2)
(6) X 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。
Y いや、ビールクライ飲むよ。(沼田 1986p. 209(1))
(7) 散歩グライしたらどうだ。(丹羽 1992p. 104(13)a)
(8) たまには旅行クライ行ってこいって。(中西 1995p. 332(14))
(9) 目玉焼きクライ2分で作れるわ。(中西 1995p. 328(2))

このうち、後者の「最低限」あるいは「低評価」を表す場合は、「とりたて詞」として、「程度」を表す副助詞とは別個に扱われることが多い。

しかし、先行研究においては、何が何に対して「最低限」なのかが曖昧なまま、直観的に「とりたて詞」に分類されているように見受けられる。例えば、沼田 1986 では、(6)の例に対して、「ビール」よりも弱い酒を想定することはできず、「ビール」が他者すべてと比べて「最低限」のものとして捉えられていると述べるが、次の例では、「最下位」が明らかに「最低」の順位であるにもかかわらず、「最下位」にクライが接続した文((10)Y)が不自然に感じられる。

- (10) X 僕、徒競走は苦手なんだ。
Y ?大丈夫、一位はとれなくても、最下位クライとれるよ。

そして、むしろ、順位が「最高」だと考えられる次の例((11)Y)の方が、許容度が高く、自然な文として解釈される。

- (11) X 僕、あがってしまって、一位がとれるかどうか心配だよ。
Y 大丈夫、君のことだから、一位クライとれるよ。

中西 1995 では、「PクライX」について、ナドとの比較から、「一般通念に基づく序列のスケール上で、Pに関してXが評価的に最低限だということを示す」(中西 1995p. 330)と述べるが、(10)及び(11)の現象は、クライの示す事物—例えば「ビール」や「最下位」といったものが、文の内容から独立した一般的知識に基づく序列の「最低」に位置付けられることから「最低限」の意味に感じられる、というわけではないことを示している。

また、次のような例を考えると、「最低限」という用語自体、適切かどうか疑問となる。(6)の「ビールクライ飲むよ」は、例えば次の二通りの場合が考えられる。

- (12) a もっと強いウイスキーやウォッカだって飲むのだから、ビールクライ飲むよ。
b 他のものはだめだが、ビールクライ飲むよ。

先の例から、「最低限」が一般常識に基づくものではないとすると、(12)では、「酒」そのもののアルコール度数の強さではなく、「何を飲めるか」ということに基づく序列が想定され得るが、aでは、より強い酒の「ウイスキー」や「ウォッカ」についても「飲む」という文脈があるので、「ビール」は「飲める酒の最低限」という解釈が可能になるものの、bでは「他のものはだめだ」とあることから、「ビール」は「飲める唯一の酒」すなわち「飲める酒の上限」ということになってしまう。

以上の例は、何が何に対して「最低限」なのかが曖昧なまま、「最低限」を表す「とりたて」のクライという分類がなされていることを示している。よって、本稿は、「最低限」を表すとされるクライについて、その「最低限」を表すクライを含む文(以下「最低限」クライ文)の特徴を記述し、「最低限」を表す文とは、どのようなことを表す文なのか、曖昧なまま用いられている「最低限」の意味をより分析的に捉え、記述し直すことを目的とする。

2. 「最低限」クライ文の特徴

本節では、「最低限」クライ文の特徴を記述する。まず、「最低限」クライ文に現れる意味が具体的にはどのように解釈される文かを確認する(2.1.)。その上で、クライの位置(2.2.)と文類型(2.3.)の面から、特徴を記述する。

2.1. 「簡単/たいしたことではない」という意味が感じられる文

ここでは、「最低限」クライ文が、具体的にはどのように解釈される文なのかを確認しておく。

まず、先行研究で「最低限」の例として挙げられた(6)からみてみよう。「君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう」という発言に対し、「いや、ビールクライ飲むよ」というクライ文が用いられている例であるが、この「最低限」クライ文は、例えば「ウイスキーは無理だが、ビールを飲むのは簡単だよ」あるいは「ウイスキーだって飲めるのだから、ビールを飲むことはたいしたことではない」といった解釈が可能である。(7)の「散歩クライしたらどうだ」は、例えば「ジョギングは大変かもしれないが、散歩だったら手軽にできるだろう」といった意味、(8)の「たまには旅行クライ行ってこいって」ならば、例えば「旅行に行くことはたいしたことではないのだから、遠慮せずに行きなさい」という意味、(9)の「目玉焼きクライ2分で作れるわ」ならば、例えば「茶碗蒸しだって作れるのだから、目玉焼きを作ることは簡単だ」といった解釈が可能である。

これらの解釈に共通するのは、いずれも、クライによって示される部分が表す事態について、「簡単/たいしたことではない」という意味が感じられる点である。「最低限」を別のことばで言い換えるならば、本稿が問題とする「最低限」クライ文は、クライで示される部分について、「簡単/たいしたことではない」という意味が感じられる文ということになる。

2.2. クライの位置とスコープ

ここでは、クライの位置に注目して、クライが何をスコープ*1にとるのか、クライで示される部分は何かを考察する。

先行研究で「最低限」の例として挙げられた(6)から(9)をみると、(13)から(16)に示すように、クライがすべて名詞句に接続していることに気付く。(17)から(20)の例も「最低限」の例として挙げられるものであるが、どれもクライが名詞句に接続している。

(13) X 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。

Y いや、ビールクライ飲むよ。(=「ビールを」)

(14) 散歩クライしたらどうだ。(=「散歩を」)

(15) たまには旅行クライ行ってこいって。(=「旅行に」)

(16) 目玉焼きクライ2分で作れるわ。(=「目玉焼きが/目玉焼きを」)

(17) 学校からクライ1人で帰れる。(=「学校から」) (沼田 1986p. 210(7))

(18) 映画にクライ行ったけど。(=「映画に」) (丹羽 1992p. 104(13)c)

(19) 部長はああ言うけど、男の人って本当は女性にお茶クライ入れてほしいものなのよ、と私に論じた。(=「お茶を」) (中西 1995p. 330(10))

(20) …皿洗いクライ僕がやってやろうじゃないの、という気持ちになった。

(=「皿洗いを」*2) (中西 1995p. 333(17))

クライが名詞句に位置する場合、「名詞+クライ+助詞」の位置と「名詞+助詞+クライ」の位置との二通りが可能であるが、久野&モネン1983の指摘にあるように、「最低限」の解釈((21)の場合「せめてバリ島で」という解釈)は、後者の「名詞+助詞+クライ」((21)の場合はb)の方がなされやすい。(＃は「最低限」解釈ではなく「程度」に解釈されることを示す。)

(21) a #世界一周旅行の途中、バリ島クライでゆっくりしたいものだ。

b 世界一周旅行の途中、バリ島でクライゆっくりしたいものだ。

(久野 & モネン 1983p. 169(47))

次の例は、「最低限」解釈がなされる(13)から(20)のクライの位置を置き換えたもので

あるが、置き換える前に比べると、「最低限」の解釈がなされにくくなったように感じる。

- (22) #ビールクライを飲むよ。
- (23) #散歩クライしたらどうだ。
- (24) #たまには旅行クライに行ってこいって。
- (25) #目玉焼きクライが2分で作れるわ。/目玉焼きクライを2分で作れるわ。
- (26) #学校クライから1人で帰れる。
- (27) #映画クライに行っただ。
- (28) #…男の人って本当は女性にお茶クライを入れてほしいものなのよ、と私に論じた。
- (29) #…皿洗ひクライを僕がやってもやろうじゃないの、という気持ちになった。

丹羽 1992 において、「とりたて」の中で「最低限」ではなく「例示」とされる例も、「名詞＋クライ＋助詞」の位置にクライがある例であり、(31)に示すように、クライの位置を助詞の後に置き換えると、「最低限」の解釈が許容されるようになる*3。

- (30) a #軽井沢クライで遊びたいね。 (丹羽 1992p. 103(12)a)
b #木曜日クライから始めよう。 (丹羽 1992p. 103(12)c)
- (31) a 軽井沢でクライ遊びたいね。
b 木曜日からクライ始めよう。

また、この「名詞＋助詞＋クライ」の位置にクライが位置する「最低限」のクライ文は、基本的に、クライの位置を動詞の直後でモダリティ部分を含まない位置に移動させた文とほぼ同義に解釈できる。次の a と b を比較されたい。

- (32) X 君はビールも何も、酒は一切飲まないだろう。
Y a いや、ビールクライ飲むよ。
b いや、ビールを飲むクライするよ。
- (33) a 散歩クライしたらどうだ。
b 散歩をするクライしたらどうだ。
- (34) a たまには旅行クライ行ってこいって。
b たまには旅行に行くクライしてこいって。
- (35) a 目玉焼きクライ2分で作れるわ。
b 目玉焼きを作るクライできるわ。
- (36) a 学校からクライ1人で帰れる。
b 学校から1人で帰るクライできる。

- (37)a 映画にクライ行ったけど。
b 映画に行くクライしたけど。
- (38)a 部長はああ言うけど、男の人って本当は女性にお茶グライ入れてほしいものなのよ、と私に諭した。
b 部長はああ言うけど、男の人って本当は女性にお茶を入れるクライしてほしいものなのよ、と私に諭した。
- (39)a …皿洗いクライ僕がやってもやろうじゃないの、という気持ちになった。
b …皿洗いをやってもやるクライ僕がしようじゃないの、という気持ちになった。

このことから、「最低限」を表すクライは命題部分をスコープにとると予想される。これを確認するために、クライを文末まで移動させクライダの形にし、モダリティ形式までスコープ内に含めた文が「最低限」解釈できるか否かをみってみる。「最低限」の解釈は文脈に左右されることはないが、「程度」の解釈は文脈によって「高程度」にも「低程度」にも解釈が可能となる。(40)(41)は休息の仕方・度合いといったものを問題とする文であるが、同じ「僕は温泉でゆっくり休みたいクライだ」という文が、(40)のように「高程度」(「温泉でゆっくり休む」が「残業をやめる」よりも休息の度合いの高い解釈)にも、(41)のように「低程度」(温泉でゆっくり休む」が「半年休職する」よりも休息の度合いの低い解釈)にも解釈できる。

(40) #君は残業をやめるので満足なのかい。僕は温泉でゆっくり休みたいクライだ。

(41) #僕は温泉でゆっくり休みたいクライだ。半年も休職するまでではないよ。

以上、クライの位置に注目すると、「最低限」を表すクライ文の特徴として次のことが指摘できる^{*4}。

(42)「最低限」クライ文のクライは、命題をスコープにとり、モダリティ部分をスコープにとらない。

2.3. 文類型の特徴

2.2. では、クライの位置に注目して、「最低限」のクライが基本的に〈命題〉をスコープにとり、モダリティを表す部分はスコープには入らないことを指摘したが、文の種類についても一定の特徴が指摘できる。「最低限」クライ文は、文類型に制限がみられるのである。

仁田1989・1991では、モダリティの構造を、「発話・伝達のモダリティ」と「言表事態あてのモダリティ」の二つのモダリティから成るものとし、前者は、後者を包み込み、後

者を規定し、文を文として存在させる必須のモダリティであると捉える。そして、「発話・伝達のモダリティ」の下位類化は文類型の下位類化でもあるとして、次のように分類する。

(43) 発話・伝達のモダリティ

- | | |
|--------|----------------------------|
| 1)働きかけ | 1)' 命令(こちらへ来い) |
| | 1)" 誘いかけ(一緒に食べましょう) |
| 2)表出 | 2)' 意志・希望(今年こそ頑張ろう/水が飲みたい) |
| | 2)" 願望(明日天気になあれ) |
| 3)述べ立て | 3)' 現象描写文(子供が運動場で遊んでいる) |
| | 3)" 判断判定文(彼の態度は良くない) |
| 4)問いかけ | 4)' 判断の問いかけ(彼は大学生ですか) |
| | 4)" 情意・意向の問いかけ |
| | (水が飲みたいの/こちらから電話しましょうか) |

この分類に基づく、「現象描写文」にクライを接続した場合には、他の種類の文では「最低限」の解釈が可能となる「名詞+助詞+クライ」の位置にクライを置くと、元の「現象描写文」としての解釈が困難となり、不自然な文に感じられることが指摘できる。次の(44)から(48)の各aと各bを比較されたい。

- | | | |
|-------|------------------------|---------------------|
| (44)a | 子供が運動場で遊んでいる。 | (仁田 1991p. 125(47)) |
| | b??子供が運動場でクライ遊んでいる。 | |
| (45)a | あ、隣が火事だ。 | (仁田 1991p. 124(41)) |
| | b??あ、隣クライ火事だ。 | |
| (46)a | あっ、荷物が落ちる。 | (仁田 1991p. 127(64)) |
| | b??あっ、荷物クライ落ちる。 | |
| (47)a | 今朝、西田から電話がありました。 | (仁田 1991p. 129(73)) |
| | b??今朝、西田からクライ電話がありました。 | |
| (48)a | 明日運動会がある。 | (仁田 1991p. 130(77)) |
| | b??明日運動会クライある。 | |

以上、文類型としては、次のことが指摘できる。

- (49)「現象描写文」の場合は、他の種類の文では「最低限」の解釈が可能となる「名詞+助詞+クライ」の位置にクライを置いても、不自然な文に感じられる。

3. 「最低限」クライ文とはいかなる文か

本節では、前節で指摘した「最低限」クライ文の特徴をもとに、「最低限」クライ文の意味を、〈実現可能性〉と〈発話者〉による位置付けという観点から分析的に記述する(3.1.)。そして、「最低限」クライ文が、〈実現可能性が高い〉と位置付けられた当該事態について述べる文であるとともに、ある事柄の〈程度性〉を問題とする文であることを述べる(3.2.)。

3.1. 実現可能性と発話者による位置付け

前節では、「最低限」クライ文について、次の三点を指摘した。

- (50)1) クライによって示される部分が表す事態について、「簡単/たいしたことではない」という意味に感じられる文だと言い換えられる
- 2) クライは命題をスコープにとりモダリティ部分をスコープにとらない
- 3) 「現象描写文」の場合は、他の種類の文では「最低限」の解釈が可能となる
「名詞+助詞+クライ」の位置にクライを置いても、不自然な文に感じられる

このうち、1)の「クライによって示される部分が表す事態」とは、2)から〈命題の表す事態〉であるということが出来る。また、3)の特徴に注目すると、仁田1991では、「現象描写文」を「ある時空の元に生起、存在する現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化して述べ伝え」(仁田1991p. 122)る文であり、「言表事態成立の確認を有するものの、判断といったモダリティを存在・分化させていない」(仁田1991p. 39)文だと説明する。よって、先に指摘した三点をまとめると、

- (51)1) クライによって示されるのは〈命題の表す事態〉であり、その事態が発話者によって「簡単/たいしたことではない」事態だと位置付けられている
- 2) 発話者の何らかの〈主観的態度〉が表明される文である

ということになる。

では、「最低限」を表すクライ文とは、どのようなことを表す文なのであろうか。「最低限」の意味は、より分析的にはどのように記述されるのか。

結論を先に述べると、本稿は、「最低限」クライ文を、次のような文だと考える。

- (52)「最低限」クライ文は、

発話者が、クライによって示される当該事態を〈実現可能性が高い〉事態で

あると位置付け、そのように位置付けた事態について、「実現したい/実現できる/実現する/実現した/実現しろ…」等の発話者の主観的態度を表明する文

である。

以下、(ア)クライによって示される当該事態が〈実現可能性が高い〉事態であると位置付けられていること (イ)その位置付けが〈発話者〉によるものであることを、具体的な例をもとに説明する。

まず、(ア)について説明する。

「発話者によって当該事態が〈実現可能性が高い〉と位置付けられている」という記述は、「〈命題の表す事態〉が発話者によって“簡単/たいしたことではない”事態だと位置付けられる」という特徴を、分析的に記述し直したものである^{*5}。(6)で説明すると、「ビールクライ飲むよ」は、発話者が「ビールを飲む」という事態を〈実現可能性が高い〉と位置付け、それを「する」と意思表示する文だということである。先に、「現象描写文」では「最低限」クライ文に解釈できないことを指摘したが、これは、「現象描写文」が「現象をそのまま主観の加工を加えないで言語表現化」する文であり、〈実現可能性が高い〉事態として提示する「最低限」クライ文と「事態」の扱い方が異なるためだと考えられる。

また、次の現象も、「最低限」クライ文が事態をそのまま提示する文ではないことを示している。「判断判定文」のうち、単に言表事態の成立を確認されているものとして把握したことを表す文は、クライを「名詞＋助詞＋クライ」の位置に置くと、単に主題化された事物についての事態成立の確認という意味以上のニュアンス—すなわち「最低限」の意味が感じられるのである。次の例は、「ある事物は何をしたか/どうしたか」という問いの答として、クライを含まない「断定」の「判断判定文」(Ya)とクライを「名詞＋助詞＋クライ」の位置に置いた文(Yb)とを比較したのだが、後者(Yb)の方が不自然に感じられる。

(53) X 花子は何をしたか？

Ya 花子はそのパーティに出席した。 (益岡 1991p. 130(38))

b ?花子はそのパーティにクライ出席した。

(54) X 太郎はどうしたか？

Ya 太郎は娘が家出した。 (益岡 1991p. 130(39))

b ?太郎は娘クライ家出した。

(55) X花子は何をしたか？

Ya 花子はテレビのスイッチを入れた。 (益岡 1991p. 133(60))

b ?花子はテレビのスイッチクライ入れた。

さらに、本稿が問題とする「最低限」クライ文は、発話者によって当該事態が〈実現可能性が高い〉と位置付けられたものであることは、次の例からも確認できる。「最低限」クライ文を、「最低限」の意味を保持したまま疑問文にしたaと、bやcのように、「ビールを飲む」ことを確認・追認する、仁田1991の「疑似疑問」の形にした文とを比べると、aの方がbやcに比べてやや不自然に感じられる。

- (56) a ?ビールクライ飲みますか?
b ビールクライ飲むでしょう?
c ビールクライ飲みますよね。

「疑似疑問」は、問いかける内容が不明であるから問いかけるのではなく、「自らの下した判断を確かなものにするために、相手からの確認や追認や同意を求めている」(仁田1991p. 152)文である。(56)の場合であれば、「ビールを飲む」という事態は、「飲むかどうか分からない」ものではなく、「飲む」と考えられるもの、すなわち、〈実現可能性が高い〉事態として位置付けられているといえることができる。

〈実現可能性が高い〉と記述することによって、本稿の冒頭で指摘した、「最低限」では説明できない例についても説明できる。次に再掲する。

- (57) a もっと強いウイスキーやウォッカだって飲むのだから、ビールクライ飲むよ。
b 他のものはだめだが、ビールクライ飲むよ。

(57)では、「ビールを飲む」こと以外の事態は、実際に実現不可能であれ、実現可能であれ、〈実現可能性が低い〉のであり、「ビールを飲む」事態は、それらに比べて〈実現可能性が高い〉事態なのである。

次に、(イ)について説明する。

〈実現可能性〉が問題とされる際には、当該事態以外に、それと同列の他の事態が想定される。「ビールクライ飲むよ」ならば、「ワインを飲む/ウイスキーを飲む」等の他の事態が想定され、「散歩クライしたらどうだ」ならば、「ジョギングをする/ウエイトトレーニングをする」等の他の事態が想定される。これらの他の事態は、それぞれ「飲酒」「運動」という共通項をもつ事態であり、一般常識に基づいて想定される事態だと考えられる。

しかし、問題の「最低限」クライ文は、それらの事態の中で、当該事態を〈実現可能性が高い〉と位置付ける文であり、〈実現可能性が高い〉という位置付けは、一般常識に基づくものではなく、発話者自身によって行われるものだと考えられる。本稿の最初に、順位が「最高」で、「一位獲得」は困難だと考えられるにもかかわらず、「最低限」

クライ文が自然に感じられる例を指摘した。次に再掲する。

- (58) X 僕、あがってしまって、一位がとれるかどうか心配だよ。
Y 大丈夫、君のことだから、一位クライとれるよ。

「最低限」クライ文での〈実現可能性が高い〉という位置付けが、一般常識に基づくのであれば、「一位獲得」はむしろ「最も実現が難しい、実現可能性の低いもの」ということになるはずである。しかし、実際には(58)のクライを含む文は自然な文として理解される。つまり、〈実現可能性が高い〉という位置付けが、〈発話者〉によってなされるものであり、発話者が当該事態を〈実現可能性が高い〉ものとして積極的に位置付けていると考えられるのである。

3.2. ある事柄についての〈程度性〉を問題とする文

さて、先に、〈実現可能性〉が問題とされる際には、当該事態以外に、それと同列の他の事態が想定され、これらの他の事態は、ある共通項をもつ事態であることを述べた。つまり、問題とする「最低限」クライ文は、当該事態が、ある共通項を有する複数の事態の中で、〈実現可能性が高い〉事態として位置付けられている文ということになる。

これは、言い換えるならば、他の事態との共通項である事柄についての〈程度性〉を問題としている文だと考えられる。本稿で問題とする「最低限」クライ文は、〈実現可能性が高い〉と位置付けられる当該事態について述べると同時に、他の事態との共通項である事柄についての〈程度性〉を述べる文ということである。例えば、「皿洗いクライやろう」という文ならば、「〈実現可能性〉が高い「皿洗いをする」を実行するぞ」という意思表示の文であるとともに、「家事を行う度合い」について、「皿洗いをする」で表される程度の“家事”を実行するぞ」という意志を表明する文とも考えられる。このうち、後者の、共通項である事柄の程度性に傾いた例が、次の例である。(59)では、共通項である事柄の程度性が問題とされる文脈において、本稿が問題とする「最低限」クライ文が、自然な文として解釈される。

- (59) X 最近でも、男性の家事分担率は非常に低く、0パーセントの人も多いらしいですね。
Y わたしは皿洗いクライしていますよ。

本稿の冒頭で、「最下位」が明らかに「最低」の順位であるにもかかわらず、「最低限」クライ文が不自然に感じられる、次のような例を指摘した。

(60) X 僕、徒競走は苦手なんだ。

Y ?大丈夫、一位はとれなくても、最下位クライとれるよ。

この例が不自然になるのも、「最低限」をクライ文が、くある事柄の程度性が問題とされる文であることに由来するものと考えられる。

本稿で問題とする「最低限」クライ文が、共通項である事柄の程度性が問題とされる文であることから、「最低限」クライ文は、発話者が当該事態を最も実現可能な事態として設定することで、ある事柄の程度性を示し、「その程度は実現したい/実現できる/実現する/実現した/実現しろ…」と表明する文だと考えられる。最も実現しやすい程度であれば、ある一定のレベルの事態の実現について何らかの主観的態度を表明することは、実現の可能性が問題となるような事態であることと、その事態の実現についての何らかの表明が有意義なものであることが必要である。野田 1995 では、「最低限」クライ文が、「*たし算クライできない」のように、否定的な述語と呼応しないことを指摘する。これは、最も実現しやすい事態として当該事態を位置付けておいて、その事態の実現を否定するということが、有意義なものとはなり得ないためだと考えられる。(60)の例では、「Xの徒競走での活躍」という事柄の程度性を問題とし、Xがどの程度活躍できるかを表明する文だと考えられるが、「最下位をとる」という事態は、可能性の有無が問題となるまでもなく実現し得る事態であり、問題なく実現する事態を取り上げて、改めてその実現について何らかの表明をすることは、無意味なことであると考えられ、Xの活躍度を示す事態としては不適当であるために、不自然に感じられるのであろう。

4. 結論

本稿は、「最低限」を表すクライ文とはどのようなことを表す文なのか、より分析的な記述を目指し、まず、「最低限」クライ文について、以下の三点の特徴、

- 1) クライによって示される部分が表す事態について、「簡単/たいしたことではない」という意味に感じられる文だと言い換えられる
- 2) クライは命題をスコープにとりモダリティ部分をスコープにとらない
- 3) 「現象描写文」の場合は、他の種類の文では「最低限」の解釈が可能となる「名詞+助詞+クライ」の位置にクライを置いても、不自然な文に感じられる

を指摘した。そして、このことから、「最低限」クライ文の意味を、次のように分析的に記述した。

「最低限」クライ文は、

発話者が、クライによって示される当該事態を〈実現可能性が高い〉事態であると位置付け、そのように位置付けた事態について、「実現したい／実現できる／実現する／実現した／実現しろ…」等の発話者の主観的態度を表明する文である

このように記述することによって、「最低限」という用語を用いては説明が困難であった例についても、統一的に説明することができた。

本稿で問題とした「最低限」クライ文は、「とりたて」のクライ文とされるものである。「とりたて」は、「とりたてられる要素」と「他の要素」との範列的な関係を示すとされるが、そのような観点から、本稿の結論をまとめ直すと、次のようになる。

- [Ⅰ] クライによってとりたてられる要素は〈命題〉である
- [Ⅱ] クライによってとりたてられた当該要素は、〈実現可能性〉のもとに、〈実現可能性が高い〉要素として、発話者によって位置付けられている
- [Ⅲ] 「とりたて」のクライ文は、[Ⅱ]のように位置付けられた要素について、実現の可否に重点を置いた発話者の何らかの主観的態度を表明する文である

本稿の記述は、「最低限」を表すとされるクライ文全体を統一的に説明し得る記述というだけでなく、「とりたて」研究全般においても有益な記述であると考えられる。他の「とりたて」表現との関係については、今後の課題となる。

注

- *1 クライのスコープとは、クライが文中で意味的に影響を及ぼし得る領域のことを指す。「とりたて」のスコープについては、沼田&徐1995を参照されたい。
- *2 この場合、「皿洗い」がガ格より文頭に位置していることから、「皿洗いは」といった主題にクライが接続している可能性も想定できるが、その場合は「皿洗いクライは」の形になると考えられるので、(20)の例は「皿洗いを」というヲ格にクライが接続したものとみなす。
- *3 丹羽1992の「例示」の例には「AクライがBだ」文のような名詞述語文・形容詞述語文も含まれるが、この場合、一部の例を除いてガを省略することができず、「*AがクライBだ」も許容されないため、基本的には対応する文がないものと考えられる。「最低限」解釈が可能となる名詞述語文・形容詞述語文の一部の例については注4を参照されたい。
- *4 なお、「最低限」解釈が可能となる文としては、次のような名詞述語文・形容詞述語文も存在する。

[1] X 水泳を習い始めたばかりなら、クロールもまだ泳げないんじゃないの？

Y クロールクライ易しいよ。

[2] X 君は環境保護派だから、この案にも反対でしょうね。

Y いいえ、この案にクライ賛成ですよ。

これらの例は、クライを述語部分に移動させた文が文末に移動させたクライダ文と同型になるため、先の例と同様の方法でスコープの範囲を確認することはできないが、名詞句の位置については、先の動詞述語文と同様、「名詞＋助詞＋クライ」の順にクライが位置しており、助詞とクライの位置を入れかえて「名詞＋クライ＋助詞」にすると、「最低限」の解釈がなされにくくなることが確認できる。次の例のaとbを比較されたい。

[3] a クロールクライ易しいよ。

b #クロールクライが易しいよ。

[4] a この案にクライ賛成ですよ。

b #この案クライに賛成ですよ。

また、これらの文は、述語が2.1.で指摘した「たいしたことではない」といった意味を直接的に表す「簡単/易しい」等の語である場合か（*「クロールクライ難しいよ」という文は不自然である）、「～する」という意味の出来事名詞の場合である。前者の場合は「～スルクライ簡単ダ」という文であり、後者の場合は「～クライ～スル」という文と同じだと考えられることから、本稿では、これらの例についても、命題をスコープにとると考える。
*5 「最低限」クライ文には、「皿洗いクライとっくにしたよ」のように、「皿洗いをする」事態が既実現した事態として表明されている文も存在する。この場合でも、「皿洗いをする」が、例えば「家事」という事柄の中で最も実現しやすいものとして位置付けられ、そのように位置付けられた事態が実際に「実現した」ことを述べているのであって、「皿洗いをする」が〈実現可能性〉が高いものとして位置付けられていることにはかわりがない。

参考文献

- 奥津敬一郎 1986 「序章」 「形式副詞」 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社, pp. 3-104
久野 暲 & 多津子・モネン 1983 「「ダケ、ノミ、バカリ、クライ」と格助詞の語順」
『新日本語文法研究』 大修館書店, pp. 157-173
近藤泰弘 1982 「副助詞の体系—現代日本語—」 『日本女子大学紀要 文学部』 32, pp. 27-38
寺村秀夫 1991 「取り立て—係りと結びのムード」 『日本語のシンタクスと意味』 III くろしお出版, pp. 3-190
中西久実子 1995 「ナド・ナンカとクライ・グライ—低評価を表すとりたて助詞—」 『日本語類義表現の文法(上)単文編』 くろしお出版, pp. 328-334
仁田義雄 1989 「現代日本語のモダリティの体系と構造」 『日本語のモダリティ』 くろしお出版, pp. 1-56
仁田義雄 1991 『日本語のモダリティと人称』 くろしお出版
丹羽哲也 1992 「副助詞における程度と取り立て」 『人文研究』 44 大阪市立大学文学部, pp. 93-128
沼田善子 1986 「とりたて詞」 『いわゆる日本語助詞の研究』 凡人社, pp. 105-225
沼田善子 1989 「とりたて詞とムード」 『日本語のモダリティ』 くろしお出版, pp. 159-192
沼田善子&徐建敏 1995 「とりたて詞「も」のフォーカスとスコープ」 『日本語の主題と

取り立て』くろしお出版, pp. 175-207

野田尚史 1995 「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版, pp. 1-35

益岡隆志 1987 『命題の文法』くろしお出版

益岡隆志 1991 『モダリティの文法』くろしお出版

(1999年6月5日 受理)